

〔一般論文〕

長野県社会福祉協議会における 組織改革と政策的意図

—— 竹内吉正の組織課長から更生資金課長への異動理由を中心に ——

中 嵐 洋

I. はじめに

戦後、わが国のホームヘルプ事業は、1956（昭和31）年4月9日の長野県告示「家庭養護婦の派遣事業について」（31厚第235号）をもって、組織化の幕開けとされ（森 1972: 31-9; 1974; 竹内 1974: 51-69; 須加 1996: 87-122; 介護福祉学研究会監修 2002: 35-7; 中嵐 2011: 28-39; 2013a: 16-28; 2013b: 2014: 2016: 2019: 1-13; 2021: 22-32 など）、そこには立役者となる同県出身の二人の人物がいた。一人は、当時の長野県社会部厚生課長を務め、1953（昭和28）年9月19日～1954（昭和29）年5月1日までの約7ヶ月間にわたる欧米社会福祉視察研修を通じ、同事業を長野県下に導入しようとして奮闘した原崎秀司（1903.8-1967.5、以下、原崎）であり、もう一人は、1955（昭和30）年7月15日から上田市社会福祉協議会（以下、市社協）初代事務局長に就任し、1963（昭和38）年4月1日には長野県社会福祉協議会（以下、県社協）組織課長へと転勤を繰り返しながら、県下のホームヘルプ事業化の推進に尽力した竹内吉正（1921.1.15-2008.12.14、以下、

竹内)である。

原崎については、彼が行った視察の行程、3人の幼子の父親としての苦悩、全日本方面委員連盟書記時代、長野県庁組織課内での働き、日本赤十字社長野県支部事務局長時代、晩年期などがすでに詳解され(中嶋 2011: 28-39; 2013a: 16-28; 2013b; 2014; 2016; 2017: 95-107; 2018: 127-40 など)、ハウスキーパーやホームヘルパーの必要性の着想につながる彼の苦悩体験や創造精神などが注目されてきた。一方、竹内に関しては、市社協事務局長としての功労や県社協組織課長としての活躍がとり上げられ(上村 1997: 247-57; 山田 2005: 178-98; 荏原 2008: 1-11; 2014; 中嶋 2010: 71-83; 2014; 2019: 1-13 など)、係数整理や調査を重視した彼が家庭養護婦(のちの家庭奉仕員)と在宅生活者との援助関係に注視したことや組織間のチームワークが強調された(長野県社会福祉協議会 50 年のあゆみ編集委員会編 2003: 45-55)。

但し、この竹内に関しては、市社協事務局長から県社協組織課長までの間の彼の思想や職務がとり上げられることはあっても(山田 2005: 178-98; 荏原 2008: 1-11 など)、その後の県社協内での動向や職務は不詳であり、例えば、1975(昭和 50)年 7 月 10 日に、組織課長から更生資金課長へと異動になった経緯などはことごとく見落とされてきた。彼が県社協内で異動になった経緯とはいかなるものであり、どのような組織改革が目ざされていたのか、あるいは、このことを竹内自身はいったいどのように受け止めていたのか。また、異動後の更生資金課長としての彼の目標は具体的に何であり、それをいかにして実現しようとしていたのか。さらには、更生資金課長時代の彼の役割や人間関係はどのようなものであり、いかなる思想展開が見られたのか。これらの諸点は、米本(1985: 8-30)、須加(1996: 87-122)、上村(1997: 247-57)、荏原(2008: 1-11; 2014)らの先行研究には見られないものであり、竹内(1974: 51-69)をはじめ、その他、約 10 本の論稿を書き残した竹内自身さえ表明していない。こうした史的事実の

空白部分を検討することは、単に新知見をもって先行研究を超えるという意味だけではなく、史的行間への着目から我々が見落としてきた重要な示唆を探ることになる可能性があり、丹念な検討が求められる。さらに、それほど筆まめであった竹内自身が論稿などで十分論じていないという事実は、逆説的に捉え直すと、この空白時期が彼自身にとってあまり吐露したくない人生の一部分であったという可能性も否めない。だが、このような苦難や知られざる一面にこそ、人となりや特徴を把握する手がかりが潜み、人の慧眼や先行を見据える源となる要素を汲み取る契機にもなるとも考えられ、着眼点としては一定の価値を見出だせよう。この着眼は、竹内という一人物を介しつつも、老人医療費の無料化や「福祉元年」が検討されていた1970年代における県社協の組織改革やその政策的意図を探究することにつながる。そこで、本稿では、空白となっている彼の県社協内での竹内の異動に着目し、彼の人物像や思考様式にアプローチすることで、戦後わが国のホームヘルプ事業化の促進の背後にあった彼の苦悩や思想を具体的に詳解することを目的とする。

研究方法は、竹内が残した11本の論稿を参照しつつも、1970年代中盤から後半に書かれた竹内直筆の3冊の日誌『日誌 S50.3.24～S50.10.7 竹内吉正』（1975年3月24日～10月7日、本稿では日誌Ⅰ）、『日誌昭和51年7月23日～昭和52年4月17日 竹内吉正』（1976年7月23日～1977年4月17日、本稿では日誌Ⅱ）、『Clean Life Diary 1977』（1977年1月1日～12月31日、本稿では日誌Ⅲ）を主に引用する。加えて、筆者作成の「竹内吉正の年表」（1886年1月27日～2009年6月24日）を参照する。

一方、倫理的配慮としては、竹内関連史料の引用許可及び研究の範囲内での公表の許可を彼の実兄、花里吉見氏から得た（2009年10月3日）。また、筆者の所属校の研究倫理審査委員会から承認を得た（中京研倫第2019-007号、2019年7月17日承認）。

以下、Ⅱ. では、竹内の県社協への悲観及び更生資金課長への異動の経

緯を論考し、Ⅲ. では、竹内の人間関係並びに「ホームヘルプの現状と問題点」の草案を分析し、Ⅳ. では、県社協の辞職及び次の職場として考えた大学教員職への志望を詳解し、Ⅴ. では、上田明照会施設長就任要請と横内浄音の忠告をとり上げ、最後に、考察と今後の課題を考究する。

Ⅱ. 長野県社会福祉協議会組織課長から更生資金課長への異動とその経緯

1. 長野県社協への悲観と更生資金課長への転任

36 都道府県が参画し、日本家庭奉仕員協会（日家協）が設立されたのは 1972（昭和 47）年 12 月であり、その後、「在宅老人福祉対策事業の実施及び推進について」（社老 62 号社会局長通知）、「老人家庭奉仕員の健康管理について」（社老第 24 号）など、施設福祉から在宅福祉へと大きな展開が見られるという社会背景の下、竹内は長野県社協組織課長としての任務を果たしていた。しかしながら、その任務はそう容易いものではなかったようで、彼の苦悩が 1975（昭和 50）年 3 月 27 日以降の日誌から窺える¹⁾。具体的には、竹内は、「引越し。箱づめの大作業となる。4 年間に 3 回の引越し作業である。整理すべきを整理するようにする。しかし、一番の在所帯として文書を有する課なれば、思うように処理できない文書もある。夕刻にはどうにか片付いた」などと記し（日誌Ⅰ：1975 年 3 月 27 日）、組織課の役割の大きさを示唆しつつ、文書の保管に腐心していた。加えて、詳細な経緯は窺い知れない面があるが、同年 7 月 4 日には、14 年間務めてきた組織課からの異動を言い渡され、以下の如く、苦渋の内情を吐露する。

正午近く局長から呼ばれて更生資金課長に 10 日付で移動（ママ）させたいとの内示がある。若干の驚きもあったが、人生というものの

中で、ひとまずかみしめて云われることを待つこととした。静かに静かにこれを聞く。忍耐し忍耐し、その道の中に味うことを心に云いきかす。そして懸命に作業を進める。人間として与えられているその道に歩み行くことは、正にきびしい自己へのかっとうであることを思いつつ、先づ静かに考える時をもつことに励みたい。静かに自己に云いきかせ静かに云いきかせて。……（同：7月4日、傍点筆者）

上記の文章から、表面的には簡潔かつ平凡な印象を受けるが、彼のこれまでの歩みや構想を捉え直しつつ、注意深く解読し直してみると、「静かに静かに」や「忍耐し忍耐し」などの繰り返し言葉から、穏やかな表現の背後に潜む、彼の静かにはしてられない葛藤や堪え切れない心境を看取でき、「とにかく公務に付く時は目の事象に追われてはげしく取組む。そのときだけは忘れる」などと（同：4月30日）、一大変局に対し、仕事に打ち込むことで忘却しようと努めている²⁾。

ところで、そもそもこの時、県社協は人事異動の意図としてどのような考えがあったのだろうか。また、竹内にとって、県社協内において組織課長から更生資金課長へ異動することがいったいどうして苦しいことだったのだろうか。解雇ではなく、異動ということであれば、公務員や勤め人にとって昇進する上でごく当たり前にあることではないのか。ここでの彼は、端的に「朝に早々辞令資金課長という内容がぽつんと出る。いやであった。『サセンだ』という意志が連る」などと書き記し（同：年7月10日）、「県社協にあって組織課長から資金課長に移行して、県社協の本流からはずれた」などと率直に吐露し（日誌Ⅱ：1977年1月15日）、それが組織体制の本流から支流へと変わることを意味していた。県社協内の本流で任務を果たせなくなったことに対する落胆を汲み取れるが³⁾、逆説的に言えば、ここでの竹内には自身の所属する組織内の本流で、中心的任務を果たそうとする気概があったと見受けられる。

人事は何が起るか分からないと言われるが、ここでの評価は、主観や感情が多分に含まれる自己評価よりも、他者を通じての評価のほうが説得的であると考えられる。では、この人事異動に対し、竹内以外の周囲の人々の反応は、如何なるものであったのだろうか⁴⁾。それを証する幾つかの日誌の記述や書簡が残っており、意味深い。例えば、1975（昭和50）年7月21日付の彼の日誌を紐解くと、「朝から1時に起きいであいさつ状を全部かき終える。今朝も増田義夫君（水内荘）から電話あり。その人事に不服。飯島鉄兄さんからもそんな電話を受ける。TEL、Letterにてその驚きを訴える人多し。全社協永田次長、加藤千代三、関沢欣三、横内浄音、斎藤守、小口白湖、原太郎、小松一三夢さんなどがそれである。しかし有難い一人ひとりである。中条正勝さんはいい桃を持参してくれた」などと記され（日誌Ⅰ：1975年7月21日）、不条理な裁定に対し、多くの同情が集まっていたことが窺える。なかでも、その典型例が、全国社会福祉協議会（以下、全社協）次長を歴任していた永田幹夫や同初代事務局長を務めた牧賢一などの手紙に表れている。永田は、竹内に以下のように伝えている。

竹内吉正大兄 拝復 暑中御健勝の趣、お慶び申し上げます。…（中略）…さて、この度はお仕事が変わられた由、大変ですね。大兄のことですからどんな業務を分掌されようと成果を挙げられることとは存じますものの、地域組織関係が長く、多くの業績を残されているだけに心残りも多いことと存じ上げます。しかし大兄の残した地域組織の成果はしっかり根づいていますし、この際新たな分野で活躍されるも亦大いに意義あることと思います。とくに世更はこのままではどうにもならぬところに来ており、新展開が求められておりますとともに、ある意味では社協の基礎にかかわる重味をもつだけに、この際大兄の御尽力を傾くにはもっとも適切なる事業かとも存じます。いろいろつま

らないこともあるかと思いますが、心機一転、お便りにもありましたように福祉する思いを静かに大切にされて御活躍下さいますようお祈りします。…（中略）…まあおたがいにもうしばらく頑張りましょうよ。御自愛を。乱筆にて 永田生（日誌Ⅰ：1975年7月27日付けの頁に貼り付けてあった手紙文）

一方、牧賢一は竹内に次のような葉書を送っている。

暑中のお見舞いとお便りを有難うございました。なつかしく嬉しく思いました。貴君が世更の担当になられた由、人の使い方を知らない連中ばかりですネ。但し、人間何をやっても無駄なことはありません。何事もその経験をプラスに生かせるかどうかはその人の力量一つだと思います。無駄な経験はありません。せめてそんな風に考えて楽しく仕事をして下さい。そしてよく施設経営が何か年会は関係なく終生やれる仕事を探す努力が必要かと思いますが如何？私も全社協の顧問に祭り上げられ段々に像がうすくなりそうです。一時ゆっくりと会いたいと思います。また大町に行きたいと思っていますから。（日誌Ⅰ：1975年8月2日付けの頁に貼り付けてあった葉書、傍点筆者）

上記の文面は大方、落ち込む竹内を激励する意味で送付されているため、その意味のとり方には注意が必要だが、少なくとも、竹内における県社協内での異動が不可解なものであったことが示唆される。ここでの竹内の無念や悲憤は如何ばかりであったかは想像の域を出ないが、少なくとも、日誌内に上記文書を貼り付け、彼自身、読み直していることから、万死一生の念を感得でき、臥薪嘗胆の気持ちであったと考えられる。

2. 竹内の異動時の挨拶並びに新規事業構想

こうした不本意な裁定でも、人事では一度決まったことを覆すことは困難であり、竹内は、疑念や疑惑に拘りすぎず⁵⁾、新たな道を見定めようとし、その心境を「異動時の挨拶文」のなかで表明する。具体的には、「このたび、事務局内の人事異動により、長年お世話になりました地域組織活動業務から、世帯更生資金貸付業務に変わりました。その担当が長かっただけに、ほんとに種々とお世話になりました。与えられました担当業務については、『資金』というものを通しての福祉する思いを静かに、大切に、努力したいと存じます」と記述され（1975年7月10日付の竹内吉正の挨拶文、傍点筆者）、さらに、『『資金』というものを通しての福祉する思い』の具体的内容を示すと考えられる彼の記述は以下のように言及される。

世更事務という中で将来的展望にたてば、①社協という働きがあるとするならば、その方向として生活に密着した正に具体的なニーズをとらえる場であること、②ケースワークにはじまりケースワークに終るということがあるが（リッチモンド）、その福祉する哲学を心を新にして学びたいこと、③その近代化はすべてに通じるところ、センター業務と一体化された今日、地域包括医療とも関係づけながら展望して見たいこと、④いっそうの努力と相変らぬ協力を願いたいこと、を中心に描いていく心を静かに思う。（日誌Ⅰ：1975年7月8日）

つまり、竹内は、苦境のなかにおいてさえ、停滞ではなく前進を志向し、上記4点を具体的に展望することで、ニーズ把握、福祉哲学、地域包括、努力・協力の重要性などを見出そうとしていた。また、同年のお盆にも、「終戦の記念日も30年の歴史を積んだが、正後の黙祷も忘れる今日の日であった。お盆の静かな日、少数の出席者のなかになって、前般に行われた関西大学の岡村教授による社協局長セミナーの講演要旨を録音テープ

から学びとることに今日一日を過す。しかし早朝（16日）に読む記事には心揺さぶる内容が豊かであり、共鳴するところが多かった。吾がさせられた職場ではあろうが、社協という総体をとらえるためには、当然のこととして丸がかえの中に安住するのではなく、その中であって主体的自己哲学の実践の場とすることに留意したい」などと学ぶ姿勢を保持し（日誌Ⅰ：1975年8月15日、傍点筆者）、哲学を实践しようとしていた⁶⁾。

反面、更生資金課長としての職務は、「総務課長を通じての資金課の圧迫も激しい」（日誌Ⅱ：1976年8月9日）、「大会後の整理の業務の進捗に心を配る。もはや山積の内容である。課員全員が事に当る。吾一人四面楚歌の中にあるを思う。常務は鼻で嗤んだような云い方で、態度で厳然とする」などの記述の如く（日誌Ⅱ：1976年9月8日）、生易しいものではなかった。こうしたなか、彼は更生資金課長としての新規事業を以下のように構想する。この13点の構想がどの程度実現したかは計れないが、少なくとも、不本意な異動後でさえ、将来展望に努めていた彼の思考を看取できる。

- ①民生委員申込みについての調査。任期中にどれ程の申込み指導をしたのか、三年間の内容。
- ②小口貸付制度の内容で、一覧表を作成。
- ③県外転出者の実態把握が必要。
- ④電算にともなう番号変更は借用証の変更をすること。
- ⑤延滞利子の時効役の一括請求について。
- ⑥借用証の返還について、電算資料との関連。
- ⑦世帯更生資金貸付事務必携（昭47.3）を再検討すること。
- ⑧県監査指摘事項について申送ること。
- ⑨民生委員費用実費弁償費については、一応1,800円を受け（個人）が寄附行為して任意借用の形とすること。
- ⑩「特に」800～1,000万円に対する文書伝達すること（研修会に申し入れて7/22～29研修費枠に）。
- ⑪一部契約にともなう改正一部定款書類から貸付規程の訂正 p.64.
- ⑫借受予算理由書。
- ⑬電算化未決事項、同和地区会議打合

会を4月早々に実現すること。(日誌Ⅲ:1977年3月31日)

Ⅲ. 竹内と中村登代子との協働並びに「ホームヘルプの現状と問題点」の草案

1. 中村による相談及び「ホームヘルパー奮戦記」の添削

上記13点の新規事業の具体的展望は、構想レベルから実践レベルに落とし込むことこそが重要であり、そのためには、一職員や一組織内の標榜としてのみに終始しないよう、現場レベルの人々との関係構築なども重要となる。標榜と実行とは異なる。また、将来に対する展望や構想のすべてが均一的にはなされないことにも留意しなければならない。とりわけ、竹内は、長野市在住の一婦人であり、のちに第5代長野県ホームヘルパー協会会長を務める中村登代子(以下、中村)と、盛んに関わり、一種の協働の取り組みを以下から窺い知れる。

久方の時を駅に中村さんと出会う。(1975年3月29日)、久方に中村登代子さんがたずねて来る。HH サービス業務での人間関係のむずかしさがよく理解できた。(同:5月19日)、社会福祉主事資格をとろうとする中村登代子さんが帰途に訪ねて来る。結局はレポートの作成に努力が欠けている点を指摘(同:6月11日)、帰途、中村登代子が訪ねて来る。社会福祉主事資格を通信教育で勉強する人として質問に答える。相当に努力する日々である。(同:19日)、中村竜子、中村登代子さんが夕食を共にという懇談会が出来た。(同:年7月18日)、中村登代子さんが午後に、将来のVolgroup活動につき相談に来られる。(同:19日)、午後には、中村登代子さんがレポート問題で相談に来られる。社会福祉主事資格をとるためのものである。(同:8月30日)、生活をきずく会の代表中村登代子さん訪ね来る。

信毎文化部での好評を伝えてくる。（日誌 B：1976 年 7 月 24 日）、中村さんの鹿教湯リハビリテーションセンターでのパネル討論原稿の点検推敲であった。（同：8 月 30 日）（日誌 I：1975 年 3 月 29 日～日誌 II：1976 年 8 月 30 日）

他方、1976（昭和 51）年 9 月 4 日の日誌を解読すると、さらに注目され、竹内と中村の二人の交流が単なる情報交換のみに留まらなかったことが示唆される。それは、ホームヘルプ事業をいかに浸透させればよいかという戦略が諮られ、例えば、中村が執筆した「ホームヘルパー奮戦記」を竹内が懇切丁寧に添削していることに象徴される。その裏付けとして、「夕刻より、HH 奮戦記を原稿点検」（日誌 II：1976 年 9 月 4 日）、「一週間連続で、中村登代子さんの HH としての奮戦記が信毎に掲載される。うまくまとめている」などの例示が挙げられ（日誌 I：1975 年 9 月 17 日）、『信濃毎日新聞』紙上に 5 回にわたって連載された中村の記事のなかに竹内思想の一端が含まれていたと考えられる⁷⁾。つまり、メディア報道をする新聞社側の意図や思惑といった要因に留意しつつも、少なくとも、竹内思想が中村という実践家を通じて、新聞というメディア媒体を介し、一般の地域住民に周知されようとしていた構図が見て取れる。さらに、竹内は、この一民間婦人に対し、さらなる大きな期待を寄せ、社会福祉主事資格取得や「ホームヘルパー奮戦記」執筆などを通じ、スキルアップや意見表明を後押ししており、実践の担い手と運営者側とのこうした地道な関わりが、ひいては福祉人材育成にもつながっていた点が重要である。

なお、更生資金課長となった竹内は、ホームヘルプ事業とも関連する職務関係上、中村に限らず、幅広い人付き合いを展開するようになる。例えば、「HH 全国会長の金子てる子さんから幾度か電話があり、上田で県総会に出席されることが明らかになり、また森幹郎とも会すことを約束する」などから（日誌 II：1976 年 8 月 5 日）、県内のみならず全国規模での

人間関係の展開が汲み取れる。他方、ホームヘルプ事業の懸案事項の一つであった労災時の補償の問題に関し、「定刻後に、明治生命の山田さん、井沢さんに相談をもちかけられて“あぶらや”に留る。福祉関係者の事故災害保障のためである。HHの身分保障も加わるので、注目に値するもの。いい方向で今井常務に折衝するように進言する」などと気を配っている（日誌Ⅱ：1976年8月6日）。この他にも、「3日は終日をHH飯沢さんの激励のため、森先生と諏訪に出向く。北原達子さん、中村登代子さんも同席。11時頃から5時までよもやま話に花が咲いてたのし一日であった。」（日誌Ⅱ：1976年11月3日～5日）、「HH手記打合せ、佐藤さん」（日誌Ⅲ：1977年9月11日）などと、同県内のホームヘルプ事業関係者が会合し、その推進を思案していることも注目されよう。こうした一方、竹内自身も『信濃毎日新聞』への投稿に奮闘している。日誌内に記された同記事の草案は、彼の思想の結晶の一部と言え、注目される（表参照）。

2. ホームヘルプ事業の奨励と「ホームヘルプの現状と問題点」の草案

表 竹内吉正における『信濃毎日新聞』記事に投稿する前の草案

「ホームヘルプの現状と問題点 主として長野県」信毎原稿 400×5×5=10,000字。

1. 民間という立場での問題提起。○HHとその歴史○民間性、開拓性、創造的○Vol活動と準公務員、将来的展望とそのあり方について

起 問題提起 20年の活動の中と改善されたこと

承 現在のHHの苦情

転 老人とヘルパーとのかかわりの限界とその老人にとって福祉とは何かを求めて
現状と実態その1

身分保障

日本は家族関係と、ホームヘルプ

中村記事 HHと保健婦

- 個人の感情と仕事（限界） 婦人より
家政婦と HH
質の向上と役割分担と専門化
HHService Vol（photo）共に生きる姿勢
結 先兵としての HH の位置とその意味とほこり
研修学習形態の体系整備と専門性～ Vol との位置
Vol と地域社会の福祉教育の現況
- 老人家庭奉仕員の現状と問題点
- ①ホームヘルプサービスの発足とその経過の中で
 - ②老人家庭奉仕員の現状と実際（その 1）当面する現場との対決
 - ③（その 2）その訴えと背景
 - ④老人家庭奉仕員制度のまわりにある課題（語りと組織化、HH の特異性）
 - ⑤ホームヘルプサービスの展望（給食サービス、一時保護）

〔出展〕 日誌 C: 1977 年 5 月 1 日。

この表の内容と、「第一回老人福祉文献賞（入選作）」を受賞した竹内（1974: 51-69）の中身とに多くの共通点が見られることも興味深い点の一つである。ここからは、竹内がこの論稿を基に、新聞記事を書き上げたと推察される。但し、いずれにしても、歴史、現状、展望という同様の構成で組み立てられ、とりわけ、草案の「結」で見られる担い手の誇り、研修体系の整備、専門性の明確化、ボランティア活動の促進、福祉教育の充実などに、今後の社会福祉分野の進展の鍵が指摘されており、これを竹内の主張と捉えても差し支えない。彼は自身の経験や見解を遍く浸透させるために、新聞記事の積極活用を目論んでいたと認められる。

IV. 竹内と森幹郎との関係並びに長野大学講師職を求めて

1. 竹内と森との交流

さらに、前章における 1976（昭和 51）年 11 月 3 日～5 日の日誌の記述

に登場した森幹郎（以下、森）と竹内との関係も看過できない⁸⁾。通常、西欧諸国の老人問題に対し造詣が深い森だが、ここでは、そうした概括的な理解に留まらず、現場や生活レベルでの彼の行動や思考へのアプローチがもたらす意味の考察が重要となる。ここでは特に、旧厚生省老人福祉専門官だった森が退職後の職場として、長野県内の大学教授への就任が模索されていた場面は注目に値する⁹⁾。日誌の記述を紐解いてみると、「会議終了後に厚生省の森幹郎専門官に夕食を共にする。本州大への転職に関する協議」（日誌Ⅰ：1975年5月23日）、「三菱信託から日興証券へただちに上田へ。上田駅では長野大学の大田方直猪常務理事が待っていてくれた。厚生省の森専門官の退任後の就職のためである。種々とその就職のための情報を聞きとる。よし。前途はいい」などと認められ（日誌Ⅰ：1975年5月31日）、森の再就職のために竹内が暗躍していた事実が浮かび上がってきた。

その甲斐もあってか、森は無事に長野大学教授に着任することになった。その一方、竹内自身にもこの一件との関わりがあつてのことかは定かではないが、思わぬ話が舞い込んでくる。それは、「朝、電車内に森幹郎氏と会合し、将来的展望で『大学講師としてこないか』という話が出る。『地域組織論』としてある。夜はセンターに宿して、業務を追う」などという竹内自身の転勤話であり（日誌Ⅱ：1976年9月21日）、彼自身が大学教員になる道が設けられようとしていた。「帰宅の途、兄宅に寄り、長野大学への就職につき協議。11時近く帰宅」などからも（日誌Ⅱ：1976年11月3日～5日）、この時の彼の真剣さが窺えよう。

2. 長野大学講師への転職の試みと「不採用」

このような経緯から、県社協更生資金課長に在職中の竹内は、突如、長野大学講師職を目ざし、試行錯誤することになる。「夕食時に森幹郎先生より電話あり。長野大学講師としての推薦就職につき相談がもちかけられ

る。永田全社協次長も森先生に呼応して行動して推薦して下さることに
なった。夜の静沈して気分をふるいたたす」などから（日誌Ⅱ：1976年
10月4日）、周囲の支援を得ながらも奮起しようとし、この他にも、「長
野市社協に飛び、その整理作業に当る。夜は久方の再就職準備としての履
歴書を作成することにする。夜12時なり」（日誌Ⅱ：1976年10月6日）、
「次長に会し、はじめて老人大学構想に直接担当官としての配慮を行うよ
う進言。『吾の採用を』改めて進言、一応の賛成を得る。夜行で妻ととも
に広島に向う」（日誌Ⅱ：1976年10月9日）、「比較的穏やかな一日。早
朝6時上田駅に妻と共に無事到着。長野大学就職に関する関係書類を森幹
郎教授に渡す」などと（日誌Ⅱ：1976年10月13日）、本業の傍ら、でき
る限りの努力をしている。さらに、長野大学の土屋学長とも面談し¹⁰⁾、彼
はその後の展開を次のように述べる。

多くのことが、特に人事問題で、わが道を決めねばならぬとき、県
社協の立場の限界と、その与えられた中味（ママ）については、自己
啓発していくべきを思うとき、長野大学講師については、もっともふ
さわしい内容であった。しかし〇〇なる教授の上田市社協から来る悪
い吾にたいする風評は、この順調な人事問題を根底からくずしてし
まった。従って、このことは一応わが希望から外れた問題となった。
また、経済問題では、妻の家庭経済を考えての苦言が出たことや、長
野大学そのものの建設に対する哲学の無いことなどを思うとき、やは
り問題にならない環境を思ったりする。しかし、なすべきをなし終っ
たいま、事を無理せずに、御旨のままにそのことを待ち、ひたすらに
忘れてならぬことは、主にあって、事を考え聞き、祈る努力を積むこ
とを思う。そんな思いを改めて、静かに考えるとき、バイブルに近付
くことを推めてくれたミス・ベーツへの想いが、よみがえってくる。
主よ、主よと呼び覚める吾を、もう一度考える。（日誌Ⅱ：1976年12

月8日、伏字筆者)

上記から、彼の転勤話は退きならぬ展開を見せ始めており、このような苦境に立った折、日本聖公会のクリスチャンでもあった竹内は、常に信仰に立ち返り、恩師のミス・ベーツにも思いを馳せていた。30歳代で受洗し、教会は違えども心の師、人生の大先輩と慕った竹内の内面で、彼はベーツと再会していたに違いない。こうした熟思の一方、彼は転勤先として予定していた長野大学にも注視し、「長野大学の講師の件も中傷はげしく、中断の現状であり、その哲学のない大学に対して何を問うかを迷うとき、教会の中から推薦を受けたことは何よりも貴重のことと思ひ巡す」(日誌Ⅱ：1977年1月15日)、「迷うなかでも、長野大学講師依頼の件は、一応大学の勝手で中断されているという現状である」(日誌Ⅱ：1977年1月29日)などと、現状分析していた。難航したこの人事は、紆余曲折の末、最終的には「不採用」となるに至ったのである¹¹⁾。

竹内自身、この結果を真摯に受け止め、「夕刻、長野大学の森教授を訪ね、講師に出向くことを中断。その間の配慮について謝辞を述べる。夜7時前に呈蓮寺を訪ね、9時になるまで詳細につき横内静雄会長と協議する。正式の就任希望と依頼。それに明照会側での好意的配慮に感謝の意を表する」などと記述し(日誌Ⅱ：1977年2月12日)、これまでの経緯に謝意を表明しつつも、大学教員職を断念する決意をしている。但し、その一方、相談先において、即座に浄土宗呈蓮寺第28代目住職の横内静雄(以下、静雄)から重責を依頼されている。社会福祉協議会での勤務経験はあるものの、社会福祉実践現場での職歴のなかった竹内にとって、この依頼も彼を悩ますことになるが、社会福祉法人上田明照会関連施設長への就任を、竹内は本格的に考想していくのである。

3. 1977（昭和 52）年元旦の竹内の心境と学びの継続

上記の一連のいきさつから、教育の大切さのみならず、実践現場の意義をより深く見出そうとしていた竹内は、1977（昭和 52）年度も波乱の幕開けを迎えており、そうしたなかでも、「民間という領域で社会福祉という仕事にたずさわって二十年。立派な働きのあったところには、必ずすばらしい人があり、そこにはチームワークがあり、そして哲学が存在していたことを、いまにして思い知らされます。また、変動する新しい問題に、いつも苦難辛苦を反復しているのも事実です。そんなことを通して、“生きる”ということのきびしさ、尊さ、そして、すばらしさを改めて心に刻む昨今です。寒さの折、切にご自愛されますように。昭和五十二年元旦 竹内吉正」などと（日誌Ⅱ：1977 年 1 月 1 日の日誌に貼り付けられた年賀状、傍点筆者）、年賀の挨拶を認めている。

ここから、社会福祉事業の進展には、まず素晴らしい人の存在が不可欠であり、そこにはチームワークがあり、さらに哲学が求められることを竹内は強調し、自らの歩みを回想しつつ念じているところに彼の信条を汲み取れる。さらに、かつて欧州ホームヘルパー活動事情視察に行った時のことを回顧し、これに参加したメンバーを集めた会合である「マーメイド会」を開催しようとしたことも注目される¹²⁾。一期一会ではなく、関係継続に努めつつ、議論の深化や学びの継続を図ろうとしていた竹内の姿勢を認識できる。

V. 上田明照会施設長への就任要請と横内浄音の忠告

ここまで、竹内の県社協内での異動並びに長野大学講師就任への模索を見てきたが、既述の通り、大学教員職は断念せざるを得なかった。荏原（2008: 1-11）は、彼が長野大学講師に就任したと言及するが、それは専任講師ではなく、のちに依頼されて受けることになる非常勤講師（「地域福

祉論」担当)のことであり、彼は必ずしもスムーズに教職に就いたわけではなかった。一方、人生の行く末や自身の役割などに迷い、苦難に苛まれた際、彼は上田駅からほど近い浄土宗呈蓮寺に頻繁に相談に行っていたことが日誌から窺える。そこでは、前出の静雄もさることながら、静雄の父親で第27代呈蓮寺住職の横内浄音(以下、浄音)による温かい心遣いや適切な助言があった。その一端を日誌から拾うと、次の通りとなる¹³⁾。

約束して呈蓮寺へ訪問。将来の上田へ帰ってからの展開につき相談に出向く。横内浄音氏は吾が構想としてあるコミュニティセンターの発想に共鳴。宗教家の動員と市民参加を呼びかけることにつき協力を誓ったが、財源的にはバックのないことが危険視された。(1975年8月24日)、午後は明照会呈蓮寺に出向く。横内浄音氏の息子、理事長の静雄氏に向う。昨夜は吾が将来明照会施設長に招聘される(1977年1月30日)、16:00に呈蓮寺に出頭。(同年3月28日)、8時30分、呈蓮寺に出向くこと。終日、明照会。(同:31日)、荒盆10:00、呈蓮寺、500円(同年8月13日)、明照会合同運動会打合せ5/6。(同年9月9日)、明照会合同運動会打合せ6/6。(同:26日)(日誌Ⅰ:1975年8月24日～日誌Ⅲ:1977年9月26日)

他方、竹内の就職の議論の深まりでは、「横内静雄氏は、その吾が立場を思い住吉寮か、見警察の施設長として是非きてほしいとの希望をもらされた。クリスチャンとの関連でも又、大学との関連でも何も構わないとのこと。そのことが、吾に期待するところ大なることが明確であった」などと記され(日誌Ⅱ:1977年1月30日)、クリスチャンである竹内が浄土宗の寺院が経営する社会福祉法人に就職することが容認されている。さらに、話は具体的に進行し、「午前中に書類を準備して県庁に赴く。午後には明照会に来る。岩波なる人に住吉寮に会する。横内静雄先生を交えて語り

合う。6時に理事、評議員会が開催される。市内の名士が加わっていた。村上市社協会長、土屋学長、塩沢、堀内会計士等の人々であった。これに出席してあいさつをする。住吉寮長としての施設長を命ぜられ、明照会全体の運営について参画してほしい旨のことを伝えられる。ここに人生第2の出発が始まったことになる。感慨も深い今晚」などと（日誌Ⅱ：1977年3月28日）、竹内自身、社協を辞職後、第二の人生の出発に心を新たにしている。こうして、竹内は、社会福祉法人上田明照会宝池住吉寮寮長就任に落ち着くことになる¹⁴⁾。

さらに、日誌を紐解くと、ここでは、浄音による竹内への忠告が特に注目される。具体的には、「老僧浄音氏は次の三点のことを吾に伝えた。①明照会精神にのって仏法の中に施設管理とその中心をおいてほしいこと、②独断専行に走らず、会長静雄の傘下に入って終始取計らってほしいこと、③『人』としてすきのある人間となるように努力してほしい、人間らしいスキを大切にしてほしいことを告げた。貴重にして重要なポイントと思う」などと記され（日誌Ⅱ：1977年3月28日）、上田明照会の人間としての活躍が期されているのが分かる。上記から、竹内への期待の大きさの反面、彼の特性への自粛も汲み取れよう¹⁵⁾。

VI. まとめ ― 考察と今後の課題

以上、竹内吉正における長野県社会福祉協議会内での異動と、大学教員職及び上田明照会施設長への再就職の経緯を見てきた。「“サセンだ”という意志が連る」（日誌Ⅰ：1975年7月10日）、「吾がさせんされた職場」（同：8月15日）、「県社協の本流からはずれた」（日誌Ⅱ：1977年1月15日）などの文言から、竹内は不本意な人事異動に耐えながら、また、長野大学講師職に関しては、「〇〇なる教授の上田市社協から来る悪い吾にたいする風評は、この順調な人事問題を根底からくずしてしまった」などと

(日誌Ⅱ：1976年12月8日)、横槍が入ったことで頓挫してしまった実態を把握した。

しかしながら、その一方、こうした苦難に直面した際、手紙や葉書で激励した永田幹夫、牧賢一をはじめ、加藤千代三、関澤欣三、横内浄音、斎藤守、小口白湖、原太郎、小松一三夢ら、少なからぬ理解者が彼を大いに慰めていた。また、大学教員職を断念した際には、横内静雄から上田明照会宝池住吉寮寮長の就任を要請されるなど、適時的な支援があった。こうした人生の波乱万丈を経験しつつも、竹内は更生資金課長として、13の新規事業を構想し、「愛情や生命をお金であがなうことはできない。けれどお金に愛情をこめることはできるし、また生命をふきこむこともできる」などと(日誌Ⅰ：1975年8月15日)、更生資金課長としての自身の果たすべき役割を認識しようと考案に努めていた。

加えて、「ホームヘルプの現状と問題点 主として長野県」の草稿を通じて、同事業の周知徹底を模索し、一方、中村登代子、森幹郎、マーメイド会メンバーなど、人的交流を重視し、民間社会福祉事業の進展に腐心していた。「立派な働きのあったところには、必ずすばらしい人があり、そこにはチームワークがあり、そして哲学が存在していた」という彼自身の文章にこそ(日誌Ⅱ：1977年1月1日)、竹内の信念や思索が窺える。87年間の彼の生涯のなかではごく一部の期間だが、県社協内での異動や社会福祉法人への再就職といった転換期においてさえ、彼は人間関係の難しさとともに信頼関係や熟思の大切さを認識していた。

戦後日本のホームヘルプ事業史研究の観点からすれば、発祥地とされる長野県下で、同事業がいかに進展していったのかの一側面を、竹内の内面を通じ掘り起こした本稿は、山田(2005: 178-98)や中崑(2019: 1-13)が追っている彼の上田市社協事務局長時代や、竹内(1991: 14-28)や荏原(2008: 1-11; 2014)が論じた長野県社協組織課長時代などでは捉え切れなかった竹内の更生資金課長時代を照射し得、県社協の本流から外れた立場

で、彼がホームヘルプ事業といかに関わり、逆境のなかでその促進にどのように尽力したのかの一端を論考した。社会福祉学や社会事業史研究における人物史研究では、人生の岐路や分岐点への注視が殊の外重要であり、先行研究の数の多寡や物語のトピック性ではなく、人々の一生涯における時間の蓄積や足跡の一つひとつをていねいに探究することが求められる。また、時期区分も重要であるが、各時期の狭間には順行・逆行など様々な力学が働いており、それらを捉える社会学的視点からの検討も必要である。こうした地道な研究から得られる成果から、政策的な示唆を認識したり我々が教訓にすべきことは少なくないだろう。

今後は、竹内が上田明照会宝池住吉寮寮長として活躍することになる、1980年代及び1990年代の他、戦前の20代前半の彼の生活や思考を、彼直筆の日誌の分析し、時代背景・社会動勢との関わりから解明することを課題としたい。

注

- 1) 同様に、「県社協も変わったものである。公務員ベースで民間性は完全に失われた感が強い。正になげかわしき次第」や（日誌Ⅰ：1975年3月29日）、「職場での自信喪失と人間関係の行きつまりに心労多く、何にも手つかずに了う。そして自分の一歩先も計画性を失う昨今の現状を思う」などにも（同：30日）、県社協という職場における彼の悲観や苦難が汲み取れる。
- 2) 「〇〇常務のかたくなに過ぎ、かみつきような主張と言動が終始あって、不愉快きわまる。いいものと悪いものとの区別が権力だけで左右されている姿は実に不愉快きわまる。…（中略）…その間の人事管理が余りにもまずい」にも（日誌Ⅰ：1975年4月16日、伏字筆者）、彼の人事面における少なからぬ不満が窺える。
- 3) 実際に、「県庁へのあいさつまわり。辞令によるあいさつ廻りでよろこんで廻るのは堀内・小林・質野・小池それぞれであり、吾だけが不足の形。その印象が、それ見たとばかり冷たい目で見るとそれだけの若干な人。ああそうですか。まあよろしくという程度の無関心ぶり。県庁内は常務の声だけに従っているという立場が空気として漂っていた」などにも（日誌Ⅰ：1975年7月12日）、彼

の苦しみややり切れなさが窺える。

- 4) 異動を家族に伝えた竹内は、「移動（ママ）の話をはじめて家族に話す。いかりをかくせずに言ったのは妻である。自己に耐えている吾は内に内に静かに思いをめぐらす。訴えることであろう。サラリーマン哲学というが、遠大な自己の達成のために進むことであろう」と述べ（日誌Ⅰ：1975年7月5日）、竹内は、自己の達成を目ざしている。
- 5) 「ほんとに長年つづいた組織課長を去る日でもある。“長沼主事が『組織課』最後の日だな”という言葉にジーンとくるものを感じる。静かに帰る。汽車におくれベンチ（駅）に退課長のあいさつ文の原稿を練る」などと（日誌Ⅰ：1975年7月9日）、竹内は感傷的になっている一方、「ともかくにも組織課長という立場では最後の仕事であろう長野市社協の市社会福祉大会への助言が行われる。その日、上倉藤一君、中村竜子とともにそれを担当する。しかし、またよかった。人をいかし、人が立派な発言をする姿が吾が育ての人々なればその感慨もまたひとしほであった」などと（同：27日）、成果を実感している。
- 6) 「お金を貸付けることによって、その人間の更生をはかるという仕事。世帯更生資金貸付業務のなかには、もともと人間の血が通っている。人間の未来への切ない望みがこめられている。愛情や生命をお金であがなうことはできない。けれども金に愛情をこめることはできるし、また生命をふきこむこともできる」などにも（日誌Ⅰ：1975年8月15日）、更生資金課長としての竹内の哲学的思考の一端が窺える。
- 7) この他にも、「夕刻には、中村さんが訪ねきたり。最近のHH業務の苦情を知らされる」などから（日誌Ⅱ：1977年3月14日）、竹内と中村との学び合いの関係性を看取できる。
- 8) 同市内のお寿司屋「武蔵野本店」にて信毎文化部の主催による“じいちゃん”という懇談会が開催されたのは1976（昭和51）年8月4日であり（日誌Ⅱ：1976年8月4日）、ここで竹内と森は懇談している。また、同7日に上田市内で開催された長野県ホームヘルパー協会総会時にも彼らは会同し、語り合っている（同：7日）。
- 9) 他方、竹内と旧厚生省との接点は、「厚生省係官が、県社協を訪ねて来ることになり、そのために、詳細な諸準備につき、心を砕くことが多かった」（日誌Ⅰ：1975年9月26日）、「土曜日というに厚生省社会局庶務課資金係が、2名事務官をともなって来る。業務の流れを知る意味で事に当る。その説明である。やりきれぬ日程を何とか、こなすことに努める。事よし」などにも（同：27日）、窺える。

- 10) ここでは、「今朝 10 時 30 分長野大学土屋学長と面談する。楽天的な明るい学長代行は、心よく面談しその主張するところを明らかに語っていた。人物としては好しい人のである。永田次長や森先生、松本先生が吾を強く推薦し、また兄が弟を思うその一念に依頼してくれているのを知って之亦感動を強くした。学校での採用の形は別として、まず間違いないことを感じとして受け止めることができた。なお、学長面接にあたり、一つだけ主張したことは、福祉のすばらしく進んだところは、必ずそこには人材が存在し、その人材を中心にしたチームワークがあり、そしてそこには哲学が定着していたことを思いおこして、より有効な働き場として、教育の場に進む決意をしていることを告げた。……」と記し（日誌Ⅱ：1976 年 11 月 28 日）、自信を覗かせる。
- 11) 「この夜、森幹郎長野大学教授より電話あり。大学教授会ではその人選に苦慮したが、結局は『竹内』は不採用という結論になったことが確定したとの報告を受ける。…（中略）…この電話のあとに残ったものは、決していい結果ではなく、何か割り切れない想いすら残る。いやな夜となった」と（日誌Ⅱ：1977 年 1 月 30 日、丸括弧内ママ）、吐露する。
- 12) 「十五、十六両日のマーメイド会の開催に当りましては、いろいろとご高配を煩わしました。厚くお礼申し上げます。スミスさんも大変に喜んでおり、和泉屋さんのところを曲ったとき、車中で涙を拭っていました。ホームヘルパーの皆さん方も十分に満足下さったものと存じております。……草々 森幹郎 竹内吉正様」などと記し（日誌Ⅱ：1977 年 1 月 15 日の日誌の頁に貼り付けてあった手紙文）、森も同会へ参画している。
- 13) 一方、「吾は関澤欣三氏を訪問する。見舞と合せて明照会に来所することを告げる。県社協の退職をほのめかす」から（日誌Ⅱ：1977 年 3 月 13 日）、竹内は、市社協勤務時代の上司であった関澤とも交流を続けている。
- 14) 「昨夜を寮に宿泊し、10 時 30 分より宝池親の会に出席する。午後は住吉部会という形で父兄と語り合う。肉親と寮生との間において、何を大切にするのか、大いに論じあう」（日誌Ⅱ：1977 年 4 月 17 日）、「横内浄音宅訪問、森幹郎教授訪問、夜、都内宿泊。HH 名簿及び HH レポート 3 冊分のこと」（日誌Ⅲ：1977 年 2 月 12 日）、「住吉部会に小遣会部会。日本短波放送テープを再生放送」などから（同：12 月 28 日）、新規ポストに就任直後から竹内が活動していることが窺える。
- 15) その後、上田聖ミカエル及諸天使教会を訪れた竹内は、水藤司祭に会し、就職について「①明照会経営の各種施設の上に吾が福祉活動が期待されていること、②施設長の一面、明照会運営のうえに力強い福祉活動を展開せんとしているこ

と、③佛教キリスト教の領域を超えた、地域福祉活動の総合的力量を発揮すべきこと」の3点を報告し(日誌Ⅱ:1977年2月7日)、黙認されている。

付記 本稿は、科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金:基盤研究(C)19K02172、研究代表者 中嶋 洋)の研究成果の一部である。

史料

- ・竹内吉正(1975)『日誌 S50.3.24～S50.10.7 竹内吉正』(1975年3月24日～10月7日、本稿では日誌Ⅰ)
- ・竹内吉正(1976-1977)『日誌昭和51年7月23日～昭和52年4月17日 竹内吉正』(1976年7月23日～1977年4月17日、本稿では日誌Ⅱ)
- ・竹内吉正(1977)『Clean Life Diary 1977』(1977年1月1日～12月31日、本稿では日誌Ⅲ)

文献

- ・荏原順子(2008)「ホームヘルプサービス事業揺籃期の研究——長野県上田市における『家庭訪問ボランティア支援事業』の背景」『純心福祉文化研究』(6)、1-11
- ・荏原順子(2014)『介護職養成教育における専門性の形成』大空社
- ・介護福祉学研究会監修(2002)『介護福祉学』中央法規出版
- ・上村富江(1997)「上田市のホームヘルプサービスを担った女性たち」『社会福祉のなかのジェンダー』ミネルヴァ書房、247-57
- ・森 幹郎(1972)「ホームヘルプサービス」『季刊社会保障研究』8(2)、31-9
- ・森 幹郎(1974)『ホームヘルパー』日本生命済生会社会事業局
- ・長野県ホームヘルパー協会(1991)『長野県ホームヘルパー協会二十年のあゆみ』
- ・長野県社会福祉協議会(1970)『文集“ねたきり老人とともに思う”(家庭奉仕員の手記から)』長野県社会福祉協議会
- ・長野県社会福祉協議会50年のあゆみ編纂委員会編(2003)『長野県社会福祉協議会50年のあゆみ』ほおずき書籍
- ・中嶋 洋(2010)「家庭養護婦派遣事業の支援システムの形成に関する研究」『日本の地域福祉』(24)、71-83
- ・中嶋 洋(2011)「ホームヘルプ事業の黎明としての原崎秀司の欧米社会福祉視

察研修（1953-1954）」『社会福祉学』52（3）、28-39

- ・中畠 洋（2012）「竹内吉正における地域福祉論の形成過程と基礎構造」『日本の地域福祉』（25）、75-85
- ・中畠 洋（2013）『日本における在宅介護福祉職形成史研究』みらい
- ・中畠 洋（2014a）『ホームヘルプ事業草創期を支えた人びと』久美
- ・中畠 洋監修（2014b）『現代日本の在宅介護福祉職成立過程資料集 第3巻 家庭養護婦派遣事業——長野県上田市資料1』近現代資料刊行会
- ・中畠 洋（2016）『地域福祉・介護福祉の実践知——家庭奉仕員・初期ホームヘルパーの証言』現代書館
- ・中畠 洋（2019）「家庭養護婦派遣事業推進の背景思想へのアプローチ——上田市社会福祉協議会事務局長時代の竹内吉正を中心に」『社会福祉学』60（3）、1-13
- ・中畠 洋（2021）「ホームヘルプ事業史におけるKさんモデル説の年代別検討——長野県上田市の事例から」『東北社会福祉史研究』（39）、22-32
- ・須加美明（1996）「日本のホームヘルプにおける介護福祉の形成史」『社会関係研究』2（1）、87-122
- ・竹内吉正（1974）「ホームヘルプ制度の沿革・現状とその展望——長野県の場合を中心に」『老人福祉』（46）、51-69
- ・竹内吉正（1991）「ホームヘルプ制度発足の周辺」『長野県ホームヘルパー協会二十年のあゆみ』14-28
- ・山田知子（2005）「わが国のホームヘルプ事業における女性職性に関する研究」『大正大学研究紀要 人間学部・文学部』（90）、178-98
- ・全国社会福祉協議会・高年福祉部（1993）『ホームヘルプ事業運営の方法——ホームヘルプ事業運営の手引き』全国社会福祉協議会